

五月のレクイエム



あべさとし歌集

五月のレクイエム

また、あの透明な哀しみを孕んだ風が吹いてくる五月

その哀しみは心の奥でじっと私の終わりを待っている



幼き日レンゲで編んだ首飾り空の深みに置き去りにされ

ゆすらうめ啄ばむ鳥が来ることを誰も止めない晴れた日の朝

薫風にたなびく煙溶け行くをただ呆然と見送りし午後

夢抱え若葉を揺らす風となる壁の爪あと形見に残し

さよならを言えないままで生きてきた心の奥の遠い日の死者



鯉のぼりの体の中を吹き抜けた風の行方がなぜか気になる

卯の花で白く着飾る山すそを吹いてきたのとそよ風が言う

春惜しみ夏に向かいし梨畑風にこぼれる花の白さよ

田植え待つ濁った水面悪戯に風がくすぐりさざ波光る

草むらのアザミは離れて見るものと分かってるのに触ってしまふ



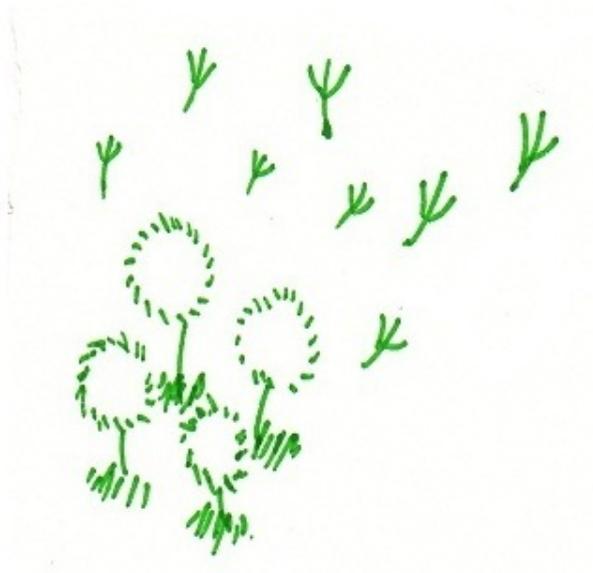
植えたての早苗の上を歩み行く五月の風の足の小ささ

街角の花屋の隅の真っ白きカーネーションがふと目に留まる

我を呼ぶ微かな声に振り向けば桜若葉が揺れて微笑む

新緑をまだら模様にも撫でてゆく不器用そうな五月の風よ

公園の桜並木の木漏れ日が丸い顔して歩道で踊る



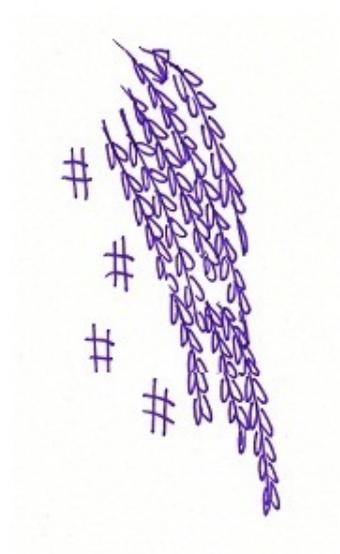
見上げれば青と緑の曼荼羅が揺らめいている風が居るから

藤棚の下にぼんやり佇めば紫ゆれて誰かの気配

彩雲が震える空に浮かんでる目に映るのは叶わぬ希望

晴天に突然の雨風冷えて狐の嫁入り不吉な予感

五月雨に洗われるたび思い出はまた少しづつ水に溶け出す



雨上がり近づいてくる山々の冴え渡る中風は吹き抜け

白き雲風に流されその後真昼の月は流されずある

晴れた夜は遠い過去から光降り私の体貫いてゆく

突然の風に驚き振り向けば冷たく光るスピカが見てる

魂は焼いても灰にならぬこと五月の風は証明してる



穏やかな五月の海が体からあふれることは絶対にならない

小走りに夏に向かって吹いていたあの風とうに夏見失い

胸痛み見えない壁が見えるとき君の爪あと闇に現る

その壁は僕らの前にあっただのずっと前からそして今でも

廻り来る五月の風に姉逝きし風を感じてリンをたたかず



五月のレクイエム

<http://p.booklog.jp/book/56364>

著者 : osakana34

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/osakana34/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56364>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56364>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ